

中華人民共和国女性看護職員の家庭における育児と教育

— 3省2自治区15病院の場合 —

ヨシダ	ユミ	カジハラ	ヨウコ	イワキ	ケイコ	マツザキ	エイジ
吉田	由美*	梶原	祥子*	岩城	馨子 ^{2*}	松崎	英士*
ヤマシロ	ヒサノリ	オオツカ	ケニコ	カワヤマ	メグミ	マツモト	アサミ
山城	久典*	大塚	邦子 ^{2*}	川山	恵 ^{2*}	松本	麻美*
サトウ	キクエ	ウチヤマ	マサミ	イノウエ	カズコ	カジヤマ	ヨシコ
佐藤	紀久江 ^{2*}	内山	眞佐美 ^{2*}	井上	和子*	梶山	祥子*
ゴトウ	サチコ						
五島	瑛智子*						
コ	玉秀 ^{3*}	苗	文娟 ^{4*}	房	彤 ^{5*}	郑	玉兰 ^{6*}
李	桂贤 ^{7*}	杨	志瑞 ^{8*}	李	秀华 ^{9*}	张	娟娟 ^{10*}

目的 中華人民共和国（以下中国と略す）の看護職員の家庭生活や勤務状況に関する広域的な調査は少ない。今回、看護交流の一環として、中国の看護事情を理解するために、中国5地域15病院における看護職員の生活と勤務状況について実態調査を行った。本報では、家庭における育児と教育について報告する。

方法 対象は、中国の5つの省または自治区に属する15病院の全看護職員である。調査の方法は、中国衛生部を介して自記式質問紙を5地域の衛生庁に郵送し、対象病院の看護部から看護職員に配布回収した。男性回答者は10人であったため、今回の分析の対象は女性のみとした。調査期間は1996年2月から4月であった。

結果 回収率は80.0%であり、有効回答数は4,284であった。

1. 対象者の年齢は18～62歳（平均32.9±SD9.0）、有配偶者は71.4%であり、配偶者の年齢は23～72歳（平均38.3±SD8.4）であった。家族形態は核家族が63.2%、拡大家族33.7%、単身3.1%であった。対象者の65.1%は子どもを有しており、その数は平均1.1±0.4（SD）人で、第一子の性別は女49.9%、男50.1%であった。
2. 乳児期の栄養法は、母乳栄養が60.1%ともっとも多く、特に母親の年齢が25～29歳で67.8%と多かった（ $P<0.01$ ）。
3. 子どもの四肢をまっすぐにし、動かないように衣類でくるんだスウォドリング（swaddling）の経験がある者の割合は、40歳以上の年齢で高かった（ $P<0.01$ ）。また、地域差が認められた。
4. 家事手伝いを行う子どもは、女子では50.3%であり、男子では46.7%であった。
5. 子どもの習い事の内容は、7～18歳では、「英語」が多かった。
6. 子どもに期待することでは、7～18歳では「勉強」が多かった。

結論

1. 乳児期の栄養法とスウォドリングの経験は年齢と地域による差がみられた。
2. 家事手伝いを行う子どもに男女差はみられず、日本の調査結果とは違いがみられた。
3. 習い事と子どもに期待することは勉学関係であり、日本と同様の結果であった。

Key words : 中華人民共和国, 看護職員, 育児と教育

I はじめに

中華人民共和国（以下、中国とする）の看護職員の生活や勤務状況に関する広域的な調査は少ない。今回、看護交流の一環として、中国の看護事情を理解するために、中国における5地域15病院の看護職員の家庭生活および勤務状況について実態調査¹⁾を行った。本報では、中国の女性看護職員の家庭における育児と教育の調査結果について報告する。

II 調査方法

調査方法は前報の「中華人民共和国女性看護職員の勤務継続要因—3省2自治区15病院の場合—¹⁾と同様である。調査の内容の家庭生活状況のうち、育児についてはスウォドリング (swaddling) —乳児を布でしっかりくるみ育てる方法—の経験の有無、乳児期の栄養法を設問した。教育については子どもの家事手伝いの状況、子どもの習い事の状況および子どもに伝えたいことの項目を設定し、自由記述とした。自由記述の内容は中国語を母国語とする者および日本語を母国語とする者が複数で協議して翻訳した。

調査時期は1996年2月～4月である。

なお、検定方法として Chi-square for independence test を用いた。データの統計分析にはエクセル統計解析 Statcel を使用した。

III 結 果

回収率80.0%、有効回答数4,284。対象者の概要については、前報の「中華人民共和国女性看護職員の勤務継続要因」において報告した¹⁾。

1. 家族の状況 (表1)

1) 家族構成

家族構成は、図1のように「夫や子どもと同居」40.6%、「親や同胞と同居」22.6%、「単身生活者」3.1%、「その他」33.7%であった。地域別では、「単身生活者」の割合が4地域では1.5～2.7%であったが、安徽のみが7.3%と高かった ($P<0.01$) (表1)。

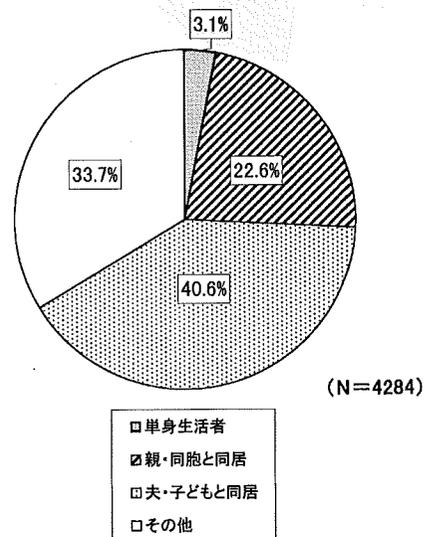
家族人数は、3人家族が38.0%と最も多く、次に4～5人が29.8%、6～9人が21.6%であった (図2)。平均家族人数は3.3人で、地域別では、多い順に新疆が4.0人、内蒙古3.7人、黒龍江3.2人、安徽3.0人、雲南2.8人であった (表1)。

2) 家族成員

配偶者を有する者は71.4%であった。地域別では、新疆69.0%、内蒙古82.6%、雲南68.5%、安徽68.2%、黒龍江68.1%であった。配偶者の平均年齢は38.3歳で、地域別にみると、新疆38.0歳、内蒙古38.4歳、雲南38.8歳、安徽37.6歳、黒龍江38.4歳であった。

配偶者の職業は中国の国家統計局による調査に準じて自由記述内容を分類した結果、全体では管理職が48.3%と最も多く、次は一般専門職で21.1%であった。配偶者の職業における地域差はほとんどなく、管理職は43.1～55.7%の範囲であり、一般専門職は14.7～24.4%の範囲であった (図3)。

図1 家族構成



* 東邦大学医療短期大学

2* 元東邦大学医療短期大学

3* 中華人民共和国衛生部

4* 中華人民共和国内蒙古自治区衛生庁

5* 中華人民共和国安徽省衛生庁

6* 中華人民共和国新疆自治区衛生庁

7* 中華人民共和国黒龍江省衛生庁

8* 中華人民共和国雲南省衛生庁

9* 中華人民共和国中日友好医院

10* 中華人民共和国北京協和医院

連絡先：〒143-0015 東京都大田区大森西 4-16-20 東邦大学医療短期大学 吉田由美

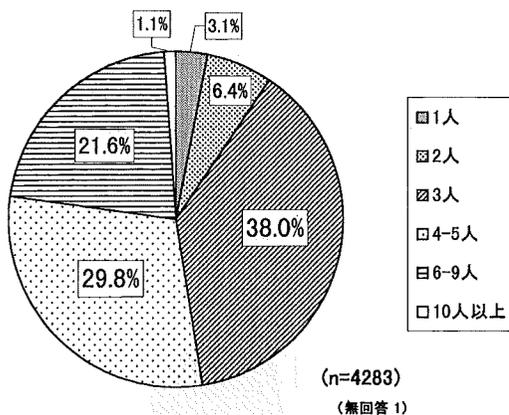
表1 回答者の家族の状況

項目		新疆	内蒙古	雲南	安徽	黒龍江	全体
家族人数	(人)※注1 (n)	4.0±2.2 (604)	3.7±2.1 (899)	2.8±1.5 (1,139)	3.0±2.0 (807)	3.2±1.8 (835)	3.3±1.9 (4,284)
单身生活者	(人)※注2 (%)	13 (2.2)	24 (2.7)	17 (1.5)	59 (7.3)	21 (2.5)	134 (3.1)
有配偶者	(人)※注2 (%)	417/604 (69.0)	743/899 (82.6)	780/1,139 (68.5)	550/807 (68.2)	569/835 (68.1)	3,059/4,284 (71.4)
配偶者の年齢(夫)	(歳)※注1 (n)	38.0±8.2 (410)	38.4±7.4 (740)	38.8±8.4 (780)	37.6±8.8 (548)	38.4±9.0 (564)	38.3±8.4 (3,042)
子ども有り	(人)※注2 (%)	376/604 (62.3)	721/899 (80.2)	710/1,139 (62.3)	485/807 (60.1)	497/835 (59.5)	2,789/4,284 (65.1)
子ども有りの子どもの数	(人)※注1 (n)	1.2±0.4 (376)	1.2±0.4 (721)	1.1±0.3 (710)	1.1±0.3 (485)	1.2±0.4 (497)	1.1±0.4 (2,789)
14歳以下の子どもとの同居	(人)※注2 (%)	295/603 (48.9)	557/896 (62.2)	546/1,136 (48.1)	386/806 (47.9)	350/832 (42.1)	2,134/4,273 (49.9)
65歳以上の高齢者との同居	(人)※注2 (%)	124/601 (20.6)	199/896 (22.2)	174/1,135 (15.3)	124/804 (15.4)	127/832 (15.3)	748/4,268 (17.5)

※注1：平均±標準偏差

※注2：該当回答数/回答総数

図2 家族の人数



子どもを有する者は65.1% (2,789人)であり、子どもの平均人数は1.1人であった。地域間での差はみられなかった。

14歳以下の子どもとの同居率は、平均49.9%であり、そのうち内蒙古は62.2%と高く、黒龍江は42.1%と低かった ($P<0.01$)。また、65歳以上の高齢者との同居率は、平均17.5%で、内蒙古と新疆は22.2%、20.6%であり、他の地域の15.3~15.4%より多かった ($P<0.01$)。

3) 炊事担当者

家庭内での主な炊事担当者については、全体では「本人」が最も多く53.1%であった。有配偶者では「本人」59.8%、「夫婦で」16.1%、「父母」8.0%、「配偶者」7.6%、「家族全員」4.4%、「その他」4.2%であった。有配偶者では、地域別でも「本人」が炊事を担当している者がいずれも最も多く、黒龍江の66.3%から安徽の53.7%までの範囲であった。

2. 育児と教育について

1) 育児について

(1) 乳児期の栄養法

母乳栄養60.1%、人工栄養26.9%、混合栄養13.0%であった。地域別、病院種別に栄養法をみたが、いずれにおいても母乳栄養の占める割合が最も多かった。回答者の年齢別にみると、母乳栄養と回答した者は25~29歳67.8%であり、35~39歳58.6%、40~44歳55.3%、45~49歳57.1%、50~54歳57.5%より有意に多かった ($P<0.001\sim0.05$) (図4)。

(2) スウォドリング (Swaddling) 経験の有無
スウォドリング経験の設問は、「新生児期の子どもの四肢をまっすぐにし、動かないように衣類

図3 配偶者の職業（地域別）

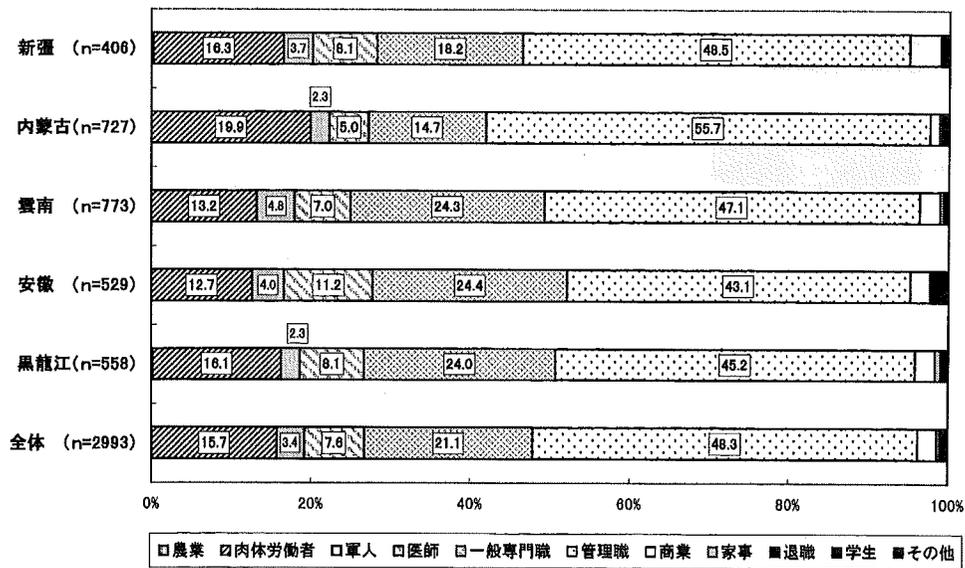
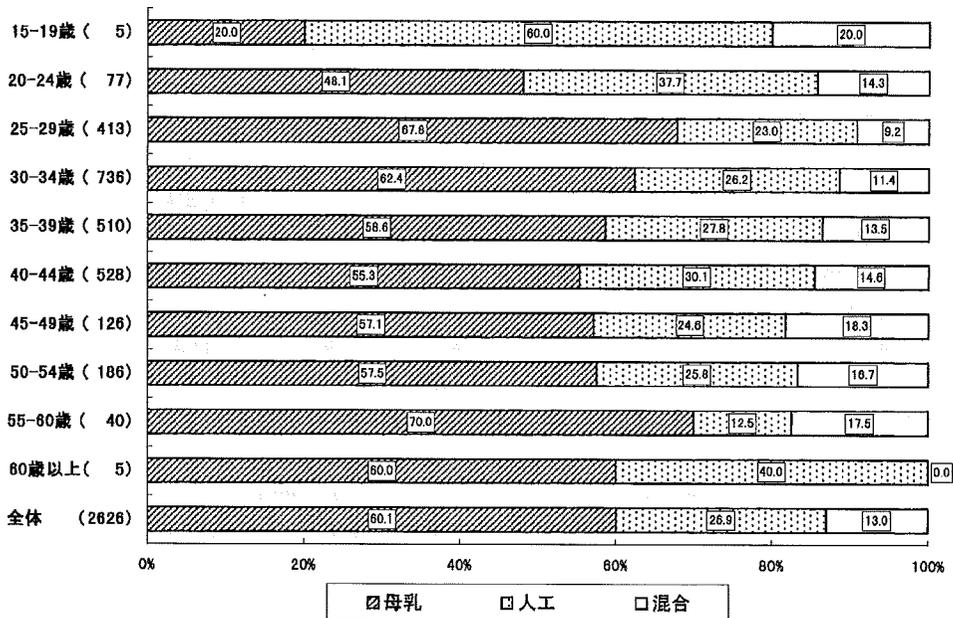


図4 乳児期の栄養法（年齢別）



でくりましたか。」である。回答は、「あり」45.8%、「なし」54.2%であった。回答者の年齢別にみると、経験「あり」と回答した者は、40歳未満では697人(41.2%)、40歳以上では439人(55.6%)となり、経験の有無に差が認められた($P < 0.01$) (図5)。地域別では黒龍江の31.3%から雲南の62.5%までの範囲であった(図6)。

2) 教育について

(1) 子どもの家事手伝いの状況

子どもの家事手伝い状況は、「行う」と回答した者が48.5%、「行わない」と回答した者が51.5%であった。地域別では家事手伝いを行う子どもの率は、多いところで雲南の56.0%、少ないところで安徽の38.2%であった。子どもの年齢別にみ

図5 スウォードリングの経験(年齢別)

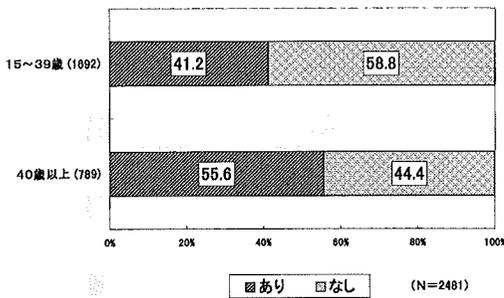
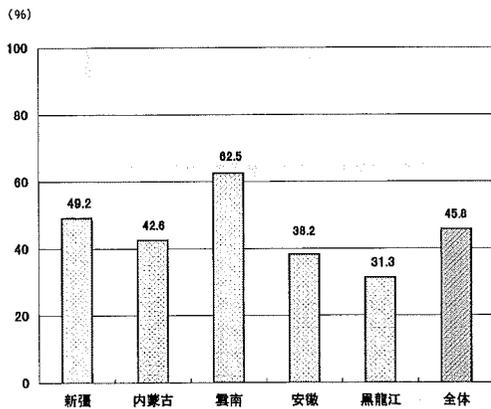


図6 スウォードリングの経験(地域別)



ると、家事手伝いを行うと回答した割合は、4~6歳29.6%、7~12歳になると約半数の49.9%となり、13歳以上では約7割の子どもが家事手伝いを行っているという結果であった。男子の46.7%、女子の50.3%は家事の手伝いを行っていた(図7)。

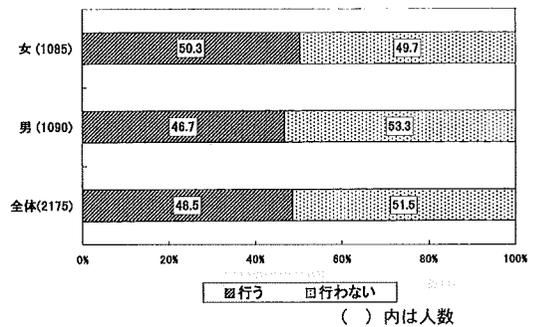
(2) 習い事

何らかの習い事をしている子ども(14歳以下の一人っ子)は46.8%であった。内容は「絵画」「音楽」「英語」などであった。地域別では、習い事をしている子どもの率が他の4地域(43.6~57.8%)に比べ、安徽では31.7%と低かった(P<0.01)。子ども(第一子)の年齢別に割合の高い習い事をみると、7~12歳では「絵画」25.3%に次いで「英語」24.3%、13~15歳では「英語」27.2%、「音楽」25.6%、16~18歳では「英語」27.6%という結果であった(図8)。

(3) 子どもに伝えたいこと

子どもに伝えたいことが「特になし」は44.4%であった。第一子の場合で子どもに伝えたいことがある者の回答内容は「勉強」22.3%、「安全」

図7 子どもの家事の手伝い



16.6%、「敬老の精神」8.9%などであった。5地域とも「子どもに伝えたいこと」で一番多かったのは「勉強」であり、25.7%から27.6%の範囲で、地域差はみられなかった。子どもの年齢別にみると、「勉強」が7~12歳では25.4%、13~15歳では28.1%、16~18歳では28.9%と高い割合であった(図9)。

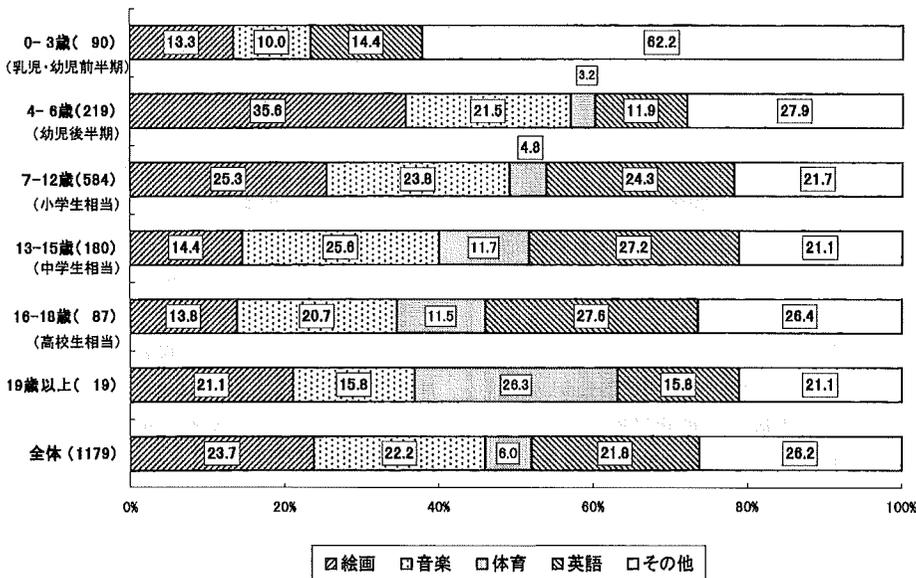
IV 考 察

1. 家族成員の状況

対象者の家族形態は、「夫や子どもと同居」もしくは「親や同胞と同居」といういわゆる核家族が最も多く、次に「配偶者を持ちかつ父母や親戚などと同居」という拡大家族と続いており、最も少ないのは「単身生活者」であった。これは中国全体における家族類型(1990年)と同様の傾向であった²⁾。中国における伝統的な家は、家父長夫婦のもとに男子たちが結婚しても同居を続ける「複合家族」であったが、中華人民共和国成立後は、「都市家族の核家族化」と「農村における複合家族の解体」の流れとなり、都市では世代的に続くタテの親子関係より一世代で終わるヨコの夫婦関係が優先する夫婦家族制が進行し、農村では夫婦家族制と直系家族制とが共存している²⁾といわれる。

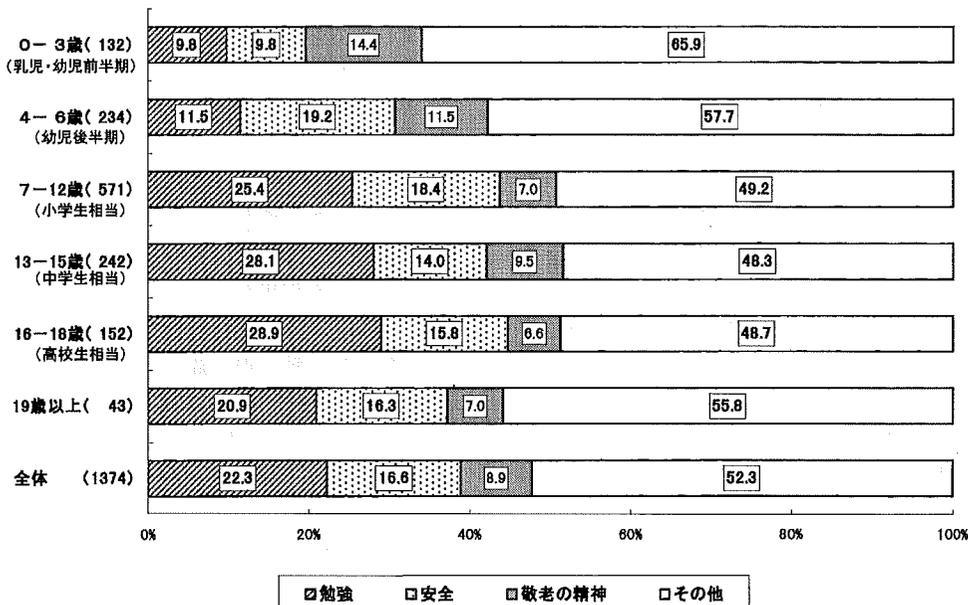
回答者の一世帯あたりの家族人数は平均3.3人であり、1995年における中国全体の3.7人²⁾とはほぼ同数である。中国の1990年人口センサス²⁾では、1人世帯6.3%、3人世帯23.7%、4~5人世帯43.57%であり、本調査の場合、単身は3.1%と非常に少なかった。地域別では、安徽省が他より高かったが、医大付属病院に集中(89.8%)し、また単身者全体の39.6%を占めており、この病院での特

図8 子ども(第一子)の習い事



() 内は人数

図9 子どもに伝えたいこと(第一子の場合)



() 内は人数

徴と考えられた。4~5人世帯は29.8%で、3人世帯(38.0%)が多かった。本調査の有配偶者は71.4%であり、子どものある者は全体の65.1%であり、夫と子ども1人との同居、すなわち3人の家族構成が最も多かった。日本の看護職者の有配偶率は62.5%、子どものある者は53.7%であ

り³⁾、いずれも本調査の方が多かった。

子どもの平均人数は1.1人であった。日本における看護職の子どもの平均人数は2.1人であり³⁾、本調査の結果の方が少なかった。世界最多の人口を占める中国では、1971年から計画出産活動が開始され、1979年から少数民族を除いて「一人っ子

政策」が開始され少子化はかなりのスピードで進んだ。中国では一人っ子であると「七優先」といわれる託児所優先入所、学費免除、医療費免除、年金加算などの7項目の優遇処置があり⁴⁾、安心して子どもを持つことができる環境にある。一方、一人っ子政策により、人口高齢化の加速や扶養制度の揺らぎなど色々な課題が生じてきており、政策によらない日本の少子化の問題と一部共通している。

配偶者の平均年齢は38.3歳であり、調査対象者の平均年齢32.9歳と比較すると、5.4歳配偶者の方が年上となる。また、配偶者の職業は地域差があまりみられず、管理職と一般専門職で69.4%を占めており、比較的安定した育児環境であると推察される。

65歳以上の者との同居率は17.5%で、1995年の日本の調査結果⁵⁾31.1%と比較すると同居率が低かった。同居者が高齢になると介護の問題等が生じてくるが、若いと育児を分担してもらうことができる可能性がある。しかし、同居率が低いので高齢者の育児への協力度はさほど高くないと思われる。

2. 育児方法の年齢による相違

1) 乳児期の栄養法

乳児を育てる時の栄養法は、母乳栄養が60.1%で最も多かった。日本の母乳栄養の割合は、1995年では1か月時で46.2%、3か月時で38.1%であり、この割合はわずかずつではあるが上昇してきている⁵⁾。しかし、今回の中国における調査結果よりは少ない。母乳は、乳児の発育、健康維持増進に必要な栄養素が最適な状態で含まれており、病気に対する抵抗因子も供給されるなどの他に授乳による精神的、情緒的発達など母子相互作用の観点からも、その重要性が世界的に強調されている。中国ではWHO/UNICEFから1989年に出された共同声明「母乳育児を成功させるための十カ条」が浸透している。日本の母親学級にあたる「妊婦学習班」では母乳保育の利点に関する宣伝啓蒙活動が成果を上げているという⁶⁾。一方、近年大都市の近代化思想の影響から、母体変形などを恐れる母親が増え、母乳による育児は一時減少していた⁶⁾といわれる。しかし、今回の調査対象は看護職であり、母子保健の情報が得やすく、受け入れやすい環境にあることや、医療従事者とし

て他を率先するという意味合いから、母乳栄養で育児を行っている者が多かったと考えられる。

回答者の年齢別に乳児期の栄養法をみたところ、19歳以下を除き、どの年齢においても母乳栄養が多い結果であったが、中でも25~29歳の回答者に最も多かった。1990年9月、世界児童問題首脳会議において、「児童の生存、保護および発展に関する世界宣言」と「90年代の行動計画」が決議され、西暦2000年までに生後4か月の「母乳のみ」による養育率を80%に引き上げることが努力目標の一つに掲げられた。中国政府は半年後の91年3月にはこれら両決議に調印している。その後、中国衛生部では、母乳保育を推進する「新生児愛護病院」の普及に努めている⁶⁾。今回の調査で25~29歳の母親は、調印当時は20~24歳であり、出産・育児の準備段階の時期にこの調印が行われたため、他の年齢層よりも母乳栄養が多い結果が得られたものと推察された。

2) スウォードリング

新生児期の子どもの四肢をまっすぐにし、動かないように衣類でくるんだいわゆる「スウォードリング」の経験は、全体の45.8%が経験ありと回答していた。スウォードリングの目的は①子どもの体型をまっすぐに育てるため、②寒さを防ぐため、③子どもをあやす場合や睡眠を促すため、④母親以外の育児参加を容易にするため、⑤子どもの安全を確保するためなどといわれている^{7~9)}。日本でも乳児用の育児用具として「えじこ」といわれるスウォードリングと類似した伝統的な育児方法がある。藁で浅い桶の形に編んだ中に蒲団を入れ、底にはおむつ代わりの布を敷いたもので、生後3~7日目ぐらいで入れ始め、人手の少ない農村村では乳児を入れて野良に連れて行くために用いられた¹⁷⁾。

回答者の年齢別にスウォードリングの経験をみたところ、39歳以下より40歳以上で経験「あり」の者が有意に多い結果となった。中国では1975年「4つの現代化」が採決され、1978年に国家目標となり、農業・工業・国防・科学技術の「革新・解放」路線が確認されている¹⁰⁾。39歳以下の母親は、まさに「4つの現代化」が奨められている中での出産・育児であり、40歳を境に伝統的な育児方法のひとつであるスウォードリングの経験の有無に差が認められたことと関係があるのではないか

と推測する。

また、スウォドリングの経験の有無には地域差が認められた。「寒さを防ぐ」ための被服として考えた場合、中国東北地方で経験率が高いと予想されたが、本調査では黒龍江での経験率は31.3%に対し南部の雲南では62.5%であり、気候との関連よりも地域の伝統によるものと考えられる。

3. 子どもの家事手伝いの状況

回答者の子どもで家事の手伝いを行っている者は男女ともに約50%であった。日本の場合、1995年にNHKが行った国民生活時間調査の結果、家事や手伝いをする子どもの割合は、小学生では男子28%、女子43%、中学生では男子21%、女子36%、高校生では男子20%、女子42%といずれも女子のほうが男子より高くなっている。そして、年齢が上がるほど男女の差が広がっている傾向にある¹¹⁾。今回の調査結果では、子どもの家事手伝いにおける男女差はみられず、日本と中国では家事について男女に期待する役割に違いがあるのではないかと推測される。今回の調査でも、炊事担当者は有配偶者でも本人のみは59.8%であり、夫婦の場合と配偶者(夫)を合わせると23.7%にものぼっている。男が職場で仕事をし、女が家で家事や育児に専念するといった性役割の分担がされるようになったのは、1760年代にイギリスでおこった産業革命であるといわれる¹²⁾。中国では「てん足」が「男は外をつかさどり、女は内をつかさどる」という古くからの原則の適用をより容易にした¹³⁾。しかし、毛沢東は「女性は天の半分をささえており、その半分を征服せねばならない」と言い切り、1954年に制定された中華人民共和国憲法第96条では「女性は政治・経済・文化・社会・家庭のあらゆる分野で男性と同じ権利をもつ」¹⁴⁾とされた。これらは、それまでの中国女性および男性それぞれの役割に変化をもたらした。そして現代では、男女の性役割に対する平等の意識が存在するのと考えられる。

一方、調査対象は夫婦共に働いている環境にあり、子どもは一人がほとんどであり、家族成員が少ないこともあって男子であっても女子であっても子どもが家事手伝いを行わざるを得ない状況であるとも考えられる。

4. 子どもの教育

子どもの習い事では、年齢別にみると、7~18

歳では「英語」が24.3~27.6%と高い割合を占め、子どもに伝えたいことでも、7~18歳で「勉強」が25.4~28.9%と多い結果となった。高校や大学受験にそなえる時期に「英語」や「勉強」の占める割合が多くなっており、近代化の流れとともに、子どもの将来を考え準備していると考えられる。安徽で習い事をしている率が他より低かったのは、英語を習っている者が3人で極端に少なかったためと考えられる。英語は国際化への対応の1つと受け取れる。中国語の「養育」という言葉は、「養」すなわち身体を育てること、「育」すなわち心と頭脳の教育という二重の意味を持っており、健康な体格も重視するが、「育」の方がさらに重要視されている¹⁵⁾。より高いレベルの教育は有利な雇用・昇進に直結し、高い社会的地位が約束されている¹⁵⁾。社会生活において学位がかなり重要な意味をもっている中国では、子どもにける期待は当然大きくなると考えられる。日本の小・中学生の学習塾に通う割合を1985年と1993年で比較したところ、男女とも増加傾向にあり、93年では小学生では男子24.9%、女子22.3%、中学生では男子60.9%、女子58.1%であった¹⁶⁾。子どもに託された期待が大きくなるということでは中国も日本も同様であると考えられる。

V おわりに

本調査は、本学と中国衛生部との看護交流の一環として行った最初の共同研究である。今後、中国の看護職員に対する健康と生活に関する調査をさらに進めて報告したい。

なお、本稿の要旨は第57回日本公衆衛生学会(1998年岐阜)において報告した。

本調査にご協力下さった中国衛生部医政司、国際合作司、中国各省および各病院の皆様へ深く感謝いたします。

(受付 2000. 3. 8)
(採用 2001. 4. 23)

文 献

- 1) 吉田由美, 山城久典, 梶原祥子, 他. 中華人民共和国女性看護職員の勤務継続要因—3省2自治区15病院の場合—. 日本公衛誌 2001; 48: 460-469.
- 2) 若林敬子. 現代中国の人口問題と社会変動. 新曜社, 1997; 75-82.
- 3) 日本看護協会調査研究課, 編. '97年看護職員実態

- 調査. 日本看護協会, 1999.
- 4) 宇野重昭, 編. 岩波講座現代中国 第3巻 静かな社会変動. 岩波書店, 1993.
- 5) 国民衛生の動向 1998; 厚生の指標 1998; 45(9)
- 6) 垣吉僚子, S・ブーコック, 編著. 育児の国際比較. 子どもと社会と親達 NHK ブックス 日本放送協会出版, 1997.
- 7) 正高信夫. 南アメリカ先住民の伝統的子育ての習慣であるスウォドリンドの機能. 心理学研究 1996; 67(4): 285-291.
- 8) 正高信夫. ヒトはなぜ子育てに悩むのか. 講談社現代新書 1995.
- 9) 正高信夫. 危機にある母子関係. 児童心理 1997; 51(13): 1153-1162.
- 10) 創元社編集部, 編: 中国がわかる本. 創元社, 1995.
- 11) 日本子どもを守る会, 編: 子ども白書, 1996年版 草土出版, 1995.
- 12) 東 清和, 小倉千加子. 性役割の心理. 大日本図書, 1989.
- 13) シャルル・メイエール, 中国女性の歴史. 辻 由美, 訳. 白水社, 1995.
- 14) 宮坂 宏, 編訳 増補改訂 現代中国法令集. 専修大学出版局, 1997.
- 15) 轟莉莉. 中国における少子化と教育. 教育と医学 1998; 46(1): 66-72.
- 16) 日本総合愛育研究所, 編. 日本子ども資料年鑑第5巻 (1996/97) 1996.
- 17) 相賀徹夫, 編. 日本大百科全書 3, 小学館, 東京 1985; 444.

CHILDCARE AND HOME EDUCATION IN FAMILIES OF FEMALE NURSES IN THE PEOPLE'S REPUBLIC OF CHINA —SURVEY OF 15 HOSPITALS IN 5 AREAS—

Yumi YOSHIDA*, Yoko KAJIHARA*, Keiko IWAKI^{2*}, Eiji MATSUZAKI*,
Hisanori YAMASHIRO*, Kuniko OTSUKA^{2*}, Megumi KAWAYAMA^{2*}, Asami MATSUMOTO*,
Kikue SATO^{2*}, Masami UCHIYAMA^{2*}, Kazuko INOUE*, Yoshiko KAJIYAMA*, Sachiko GOTO*,
Gong YUXIU^{3*}, Miao WENJUAN^{4*}, Fang TONG^{5*}, Zheng YULAN^{6*}, Li GUIXIAN^{7*},
Yang ZHIRU^{8*}, Li XIUHUA^{9*}, Zhang JUAN JUAN^{10*}

Key words : The People's Republic of China, Nurses, Childcare, Home education

Purpose The purpose of this study was to investigate the actual conditions of childcare and home education among families of female nurses in the P. R. of China.

Methods The subjects were nurses from 15 hospitals in 3 provinces and 2 autonomous areas. They were surveyed by questionnaire regarding their childcare and home education. It was distributed by the Ministry of Health in the P. R. of China and data were collected between February and April in 1996.

Results A total of 4284 (80.0%) questionnaires were collected.

1. The age of the subjects was between 18 and 62 years old with a mean of 32.9±9.0 (SD) years 71.4% of them had husbands, whose ages were between 23 and 71 years old, the mean age being 38.3±8.4 (SD) years. The family types were 63.2% nuclear family and 33.7% extended family, with 3.1% being single. 65.1% of the subjects had children, whose mean number was 1.1±0.4 (SD). Firstborn children were 49.9% girls and 50.1% boys.
2. The most popular method of infant nutrition was breast-feeding, utilized by 60.1%. The highest rate (67.8%) was in the age group of 25 to 29 years old ($P<0.01$).

3. The practice of "swaddling" (wrapping the child so as not to allow movement) was more common in the over 40 year old age group than the under 40 year old group ($P < 0.01$). Swaddling-practice showed significant differences by area.
4. The rates for children who helped with housework were 50.3% for girls and 46.7% for boys.
5. A number of children between 7 and 18 years old were studying English privately.
6. The greatest expectation of the subjects, for their children aged between 7 and 18 years old, was to study.

- Conclusions**
1. Infant nutrition showed significant differences between generations, and swaddling-practice differed with the generation and the area.
 2. Although girls help their parents more than boys in Japan, boys and girls equally helped their parents in the P. R. of China.
 3. Concerning the topics of private learning and parents expectations, the results were similar to those in Japan.

* College of Health Professions, Toho University.

2* Formerly College of Health Professions, Toho University.

3* Nursing Division of the Dept. of Medical Administration of MOH.

4* Health Bureau of Inner Mongolia.

5* Anhui Provincial Health Bureau.

6* Health Bureau of Xinjiang.

7* Heilongjiang Provincial Health Bureau .

8* Yunnan Provincial Health Bureau .

9* Nursing Dept. of China-Japan Friendship Hospital

10* Division of Foreign Affairs of Peking Union Medical Hospital